

佐藤進と口腔外科*

谷 津 三 雄**

佐藤 進が帰朝後順天堂医院において実施した手術のうち、特に口腔外科領域について順天堂医事雑誌、増訂・外科各論を資料とし述べてみたい。

佐藤 進略伝

阿知波氏によると

常陸国久慈郡太田村、高和清兵衛の長男として弘化2年11月25日生(1845・幼名高和東之助、後に介石)。天保14年(1842)佐藤泰然、佐倉に順天堂を起す。その門人に三宅良斎、山口舜海の英才がいた。この山口(後の尚中)を養子に迎える。明治6年(2月2日)佐倉順天堂を本郷湯島に移し、院長・佐藤尚中(舜海)となる。

安政6年(1859)泰然家督を舜海(尚中)にゆずる。この年に高和東之助(佐藤 進)入門。慶応2年(1866)佐藤舜海(尚中)の門人中の英才高和東之助を養子とする。これが佐藤 進である。

明治政府が発行した海外渡航免状第1号として、外科学修得のため、明治2年6月21日アメリカ経由でドイツに渡航、ベルリン着は同年9月7日、ビルロートに師事、ウィーンやパリーの大家の手術を見学し、明治8年8月6日に帰国。(私見は後述するように進が帰朝して行なった最初の症例の入院日が6月13日なので、帰国は6月13日以前と思う)尚、最初は私費留学生、明治3年10月に官費留学生となる。

また中野氏によると

明治2年佐藤 進私費ヲ以テドイツニ留学ス、之レ医学ニテドイツニ留学スルノ始ナリ。明治8年7月ビルロートニ就キ外科修得シタル佐藤 進帰朝ス。リスター氏防腐法ハ既ニ前年来朝ノシュル

チェニヨリ我邦ニ輸入セラレシモ邦人ニテ本法ヲ習熟セシハ佐藤 進ヲ以テ嚆矢トス。とし、その帰朝の年月日については一致しない。

順天堂医事雑誌について

佐藤尚中蔵版、英蘭堂島村利助発行の和綴八巻(15×22cm)で、その発行年月日は次の如くである。

巻1(明治8年10月)、巻2(同11月)、巻3(同12月)、巻4(同9年2月)、巻5(同3月)、巻6(同7月)、巻7(同9月)、巻8(同10年2月)

岡崎桂一郎氏は本邦外科史に「佐藤 進ノ順天堂ニ於テ外科ノ講筈ヲ開キ外科手術ヲ生徒(市中ノ開業医)及陸軍軍医ニ房観セシメ、明治9年ニハ順天堂医事雑誌ヲ刊行シ主トシテ外科療法ヲ発表セリ。是レ我邦ニ於テ外科治験ヲ公示セン雑誌ノ嚆矢トス」―「明治10年西南役ノ時、大阪陸軍臨時病院ヲ開キ、一等軍医正石黒忠憲及軍医監佐藤進ヲシテ之ヲ監理セシム」とあることから、明治10年2月に西南の役が始ったのでそれ以後は刊行されなかったと推論される。

創刊号の序に「男進欧州より帰りきにけり。ここ已己(明治2年)春我国未だ医学の全からざるを憂ひ余の志をも継がんとして憤発の余り海外万里に独行し、伯霊の大学に入り医学の予科より初め本科をは残さず修め尽して終に学士の允可を受得たり。猶飽たらず更に維納、巴里を巡歴し彼の大学士、大医先生などと面語討論しつつ日々各療奇術を目撃して帰れるなり……すべからず門生某等側にありて、それを棄置かんは遺憾の事として筆記して冊子なしぬるを順天堂医事雑誌と題して……有志の輩に分あたえんとす時に明治8年乙亥月笠翁真逸、佐藤尚中識」この尚中の序文をして佐藤 進帰朝直後の記であると阿知波氏は述べていると思われる。しかし、後述するように進が

* Susumu SATO and Orad Surgery

** Mitsuo YATSU 日大松戸歯科大学

行なった第1症例の患者入院は6月13日で、その手術は7月26日であるので医事雑誌の序文の記、明治8年8月を以て佐藤 進の帰朝とした点はいささかの疑問がある。なお凡例に、

一、此書ハ順天堂治験及ヒ臨床講義ヲ基礎トシ
医事ニ関スル有益ノ事件ヲ逐次編集スル者ナリ
一、施術講義等多ク、進先生ニ係ル故ニ一々名
ヲ掲ケス、笠翁先生ニ係ル者ハ別ニ名ヲ掲ケテ
之ヲ分ツ可シ、

とあるので巻1の第1症例は、進が帰朝後行なった最初の症例と考えてよいと思う。

医事雑誌中の口腔外科的記載（治験例）

巻1. 口蓋欠縫綴術治験

症例1：明治8年6月13日入院，同7月26日施術ス一両刃ノ刀ヲ以テ，筋肉ヲ骨膜ト共ニ骨面ヨリ剝離一後図（ニ）（ホ）ノ器ヲ以テ縫綴なお佐藤 進著「外科各論」P460の「口蓋被裂縫合術沿革」に、ランゲンベッキ氏ノ改良法トシテ粘膜炎ト共ニ骨膜ヲ剝離一帰朝ノ際ラ氏が用フル所ノ器械ヲ悉ク携ヘ帰タリ而シテ余ガ始メテ該手術ヲ施セシハ明治8年ニテアリキ、当時、順天堂医事雑誌ニ掲ケテ手術ノ方法ヲ世ニ公ニセリ、とあって、この第1例を再録しているので進は8月（阿知波氏）及7月（中野氏）の帰国ではなく、この患者が入院した6月13日以前と思う。なお本症例は骨膜下剝離術を行なつて縫合した最初の症例として意義が深い。

症例2：25歳男子，天然口蓋破裂は明治8年7月28日入院，同8月2日施術。このように骨膜下剝離術を導入した点，口腔外科史上特筆される。更に外科各論P474に明9年にも男子，口蓋破裂の手術が追加されている。

巻5. 上顎骨纖維腫割出治験

28歳女子，明治8年10月20日入院，骨肉瘤と診断，同11月20日迷朦法下で手術（ランゲンベッキ氏法）一顕微鏡ニ照スニ尽ク纖維ヨリ構造スル者ニテ，其中一冊ニ，弾力纖維ヲ混ユ，毫モ肉瘤固有性ノ房ヲ見ス一即，鏡検で纖維腫と確定したと述べている。一ランゲンベッキ氏常ニ施コス所ノ自家ノ割法ニシテ余曾テ之ヲ数々屍ニ試ミタリ，其法簡ニシテ他法ニ勝レリ，一「外科各論」P424に

「本邦ニ在テハ該術ノ沿革ヲ繹ヌルニ術ナシ一上顎骨一半或ハ全截除術ノ如キハ往時先輩ノ實際ニ試ミラレシヤ否ヤ未タ之ヲ聴カス，余ハ明治8年一婦人ノ上顎竇ニ生セシ肉腫ニ「ランゲンベッキ」氏ノ施術法ニ從ヒ口蓋骨ト共ニ上顎骨ノ一半截除セリ，是レ余カ上顎骨ニ截除術ヲ施セシ初メトナス」と本症例を再録してある。

巻5. 舌内皮癌割出治験

42歳男子，明治8年10月30日入院，同11月1日進先生診シテ曰ク，此潰瘍内皮癌ニ因スル乎，將タマタ煤毒ニ因スル乎…11月18日迷朦水ヲ吸入セシメ先ツ腮下ニ於テ左ノ舌動脈結紮法ヲ行ヒ，舌ノ半体ヲ切取ツテ了ル。12月19日ヲ以テ院ヲ辞ス一病床講義ニ曰ク舌ノ新生物ニ属スル者多シと腫瘍に対し今日の如く新生物という語を使用している。

巻7. 上顎骨囊腫治験一外科各論P382に再録

45歳婦人，明治9年6月10日一ランゲンベッキ氏ノ法ニ依テ一16日縫糸尽ク拔除一25日ニ院ヲ辞ス一病床講義日，余上顎骨ニ割去術ヲ施コスコト既ニ二回ニ及ベリ（注…巻3の例）

又，巻7の18丁に「記者曰進先生順天堂ニ主タリシヨリ…邦人未タ曾テ此ノ如キ精巧ノ手術ヲ上顎ニ施コセシコトヲ聞カス，如此キ患者ハ病苦ヲ抱キテ空シク命ヲ天ニ捧ケ医ハ手ヲ束ネテ之ヲ傍視スルニ至ル一身分貧賤ニシテ滞院中費ヲ出タス能ハス，腫ヲ抱イテ徒ラニ死ヲ俟ツ者亦少ナントセス，噫悲歎ノ限ナラスヤ一院中別ニ法ヲ設ケ師ニ乞フテ金ヲ積ミ以テ身分貧賤ニシテカカル宿痼ニ罹ル者ヲ救フノ方ヲ立ツ一此書ヲ読ミ吾党ト志ヲ同フスル者ハ為ニ一書ヲ託シテ病者ヲ寄セヨ，若効アラバ病者ノ幸福ノミナラス，亦吾醫道ノ義務ニシテ天ニ報ユルノ一端ナラスヤ…」

顎口腔外科手術患者の予後は化学療法や放射線療法の発達した今日といえどもかなりの長期間入院を必要とすることをあわせ考えれば，この一報により口腔外科の患者が多くなったと考えられる。

佐藤 進纂著：外科各論について

明治13年10月より逐次刊行（英蘭堂・島村利助），同15年に全20巻を完成しそれに自己の治療経験を追加し，「増訂外科各論」として明治20年

10月に巻の1～巻の13を明治23年5月に刊行した。

○凡例に挿入する所の図は……我順天堂医院ニ於テ歴見セン患者ノ撮影或ハ模画中最モ奇ナル者ヲ撰テ之ヲ掲載ス——本書の内容から順天堂医事雑誌の続刊とも考えられる。

○内容と刊行年月日

巻1：第1編・頭蓋外傷，P112 明治20年12月刊50銭

巻2：第2編・頭蓋疾病，P113～156

第3編・顔部外科的諸病，P157～204

第4編・顔部腫瘍，P204～210

第5編・顔神経痛，P210～240 明治21年1月刊50銭

巻3：第6編・顔各部諸病（外鼻，鼻腔，兎唇，唇諸病），P241～362 明治21年3月刊40銭

巻4：第7編・顎骨諸病，P363～450 明治21年4月刊40銭

巻5：第8編・口腔諸病，P451～557 明治21年7月刊50銭（口蓋諸病，舌諸病，耳下腺諸病そのうち聴器557～574）

巻6：第9編・（上）顎部諸病（顎部，甲状腺），P575～686 明治21年10月刊50銭

巻7：第9編・（下）顎部諸病（気管，咽頭），P687～796 明治22年3月刊50銭

巻8：第10編・胸部諸病，P797～897 明治22年4月刊50銭

巻9：第11編・腹部諸病，P899～1004 明治22年6月刊50銭

巻10：第12編・胃及腸管，P1005～1145 明治23年1月刊50銭

巻11：第13編・直腸及肛門，P1147～1250 明治23年2月刊50銭

巻12：第14編・尿器諸病，P1251～1415 明治23年3月刊65銭

巻13：第15編・生殖器，P1417～1554 明治23年5月刊60銭

で巻1～8と巻9～12とそれぞれ合本に，前後2冊，計6円75銭（明治20年頃のかげそば1銭，現100円，1万倍，67,500円となるし，又，東京→岡

山間の運賃を比較すると，明治26年汽車代→4円46銭で26時間3分，昭和47年ひかり1号で4時間10分で4,860円，所要時間は1/6以下，運賃は1,100倍となる）

なお本書における外科各論中口腔外科の占める率は，

- | | | | |
|--------|------|----------|------|
| 1. 脳外科 | P156 | 2. 顎口腔外科 | P400 |
| 3. 耳と顎 | P128 | 4. 咽喉食道 | P112 |
| 5. 胸部 | P100 | 6. 腹部 | P105 |
| 7. 胃及腸 | P140 | 8. 直腸及肛門 | P103 |
| 9. 尿器 | P164 | 10. 生殖器 | P137 |

となり約1/4を口腔外科で占めている。なお本書は症例報告がのっているのだから順天堂に口腔外科の手術患者が多く来院したかがわかる。

なお明治15年刊，シュルツ原著，長谷川 泰校閲，宇野 朗補訂，山田良叔訳述（順生堂蔵版）上下合本の外科各論の口腔外科領域は，第2編顔部諸病P51～152＝101ページにすぎず，シュルツ（Emil A.W. Schultze）は明治7年（1874）12月にミュルレル及ホフマンに代り来朝，明治14年（1881）4月にスクリバと交代又最新刊（昭和43年4月南山堂）西村，陣内，光野，井口編・新外科学の第7章，藤野 博著顎及口腔外科はP573～635＝62ページである。なお価格は第1巻5,500，第2巻5,500，第3巻5,500の計16,500円であるので，佐藤 進の外科各論はかなり高価なものであるといえる。

増訂外科各論の口腔外科的記載

P182：下顎骨骨折一余が明治10年大坂において截除術を施こせし，一兵卒の破砕せる下顎骨なり。

P261：造鼻術一本邦に在ては，家君尚中先生今を距るおよそ26年前に佐倉に於て施術せられしを以て蓋し嚙矢となす。と記されている。従って各論の初刊本は明治13年（1880年）から明治15年（1882年）までの刊行であるから，それより26年前とすると安政元年（1854年）から安政3年（1856年）となる。なお，佐藤泰然の養子に山口舜海（佐藤尚中）がなったのは嘉永6年（1853年）であり，又，泰然が家督を舜海（尚中）に譲ったのは安政6年（1859年）でその年

に高和東之助（佐藤 進）が入門している
で、このわが国最初の造鼻術は、安政元年から
安政6年までの間に行なわれたと思われる。

P319：兎唇—余はランゲンベッキ氏に従い常に
両刃刀を用う。

P342：口唇癌とタバコとの関係を論ず。

P367：燐毒性骨膜炎—本邦に在ては摺附木の製
造未だ欧州の如く盛ならざるを以て燐毒性骨
膜炎を見ること稀なるべし。余、欧州に在て数
々之を目撃すと雖も本邦に於ては未だ之を見さ
るなり。とあって明治15年にはあまりマッチは
使用されていなかったことがわかる。なおわが
国では明治8年に清水 誠がマッチの製造を開
始している。

P370：上顎洞内に臼歯の刺入—歯性上顎洞炎の
報告例。

P405：歯牙潰瘍即チ齲歯

—異常なる一種の酸性唾液の化学的作用に由て
歯牙の表面を侵すに由る—

——一種の寄生物を発見す、これを「レプトリキ
ス・ブッカーリス」と—

P416：拔牙は歯鍵と歯鉗子で行なう。

疼痛アルトキハ患歯＝腐蝕薬或ハ鎮痙薬ヲ貼ン
或ハモルヒネ及ビコカインノ皮下注入ヲ試ムベ
シ。と記され、当時の拔牙はほとんどが無麻酔
下で行なっていたのに順天堂ではコカインの注
射が行われていたことを知る。

佐藤泰然没100年の展示に拔牙鉗子があったが、
順天堂では当時かなり拔牙が行なわれたと思わ
れる。

P419：本邦に在ては歯牙の撰生未だ欧人の如く
ならず。——近來齒科医にして笈を米国に負い
成業帰朝し、業を開く者、或は本邦に於て齒科
を修学し業を開く者次第に多し。是れ本邦齒科
医の一大改良にして、とある。このことは明治
8年小幡英之助がわが国で最初の齒科医師とな
ったこと又、明治9年長谷川 保がドイツよ
り、又明治11年高山紀齊が米国よりそれぞれ帰
朝したことなどをさしているのであろう。

P424：上顎骨切除術を始めて行なう（医事雑誌の
再録）

P435：上顎骨切除術は出血が気管内に入ること
を防ぐ為に半酔半醒の間に在られしむるを良と
す。

P436：余項目「コカイン」を局所麻酔薬として
大なる各種の外科手術に試用して著しき効績を
得たる。殊に上顎截除術に施用したる如きは効
績の最も著しき者なり、10%乃至5%コカイン
を4筒までを極度とす。

P460：粘膜と骨膜との同時剝離、に明治8年の
口蓋裂の自験例（医事雑誌巻の1）がのってい
る。

P474：明治9年男子口蓋裂の図あり。

結 び

「順天堂医事雑誌（巻1～8）」佐藤 進「増
訂・外科各論」（明治20～23年、初刊・明治13
～15年）及明治15年刊シュルツ氏外科各論を資
（史）料とし、更に中野、藤井両氏の医事年表
をもとにし、佐藤 進の口腔外科史実は次の如
くなる。

1. 口蓋裂閉鎖術を明治8年7月26日骨膜剝離
術で行なう—両刃、特殊器械。

2. 我が国最初の上顎骨切除術は鋸を使用し
て明治8年11月20日行なう。1. と2. はラン
ゲンベック氏術式を伝える—診断に顕微鏡を使
用。

3. 明治2年6月21日、私費でドイツに留学、
ビルロートに師事し、初めて本格的にクロロホ
ルム麻酔及びリスター氏防腐法を修得。

4. 順天堂医事雑誌巻1の第1症例が口蓋裂閉
鎖術で、その入院が明治8年6月13日であるか
ら、帰朝はそれ以前と思う。癌や肉腫を新生物
といった。

5. 口腔癌患者の貧者に対し、特別扱い方をし
た。

6. クロロホルム麻酔からコカイン麻酔に口腔
疾患の手術時の血液の誤入による気管室息の防
止を目的として行われた—局所麻酔薬として
コカインの偉効あるを知れり（明治21年7月各
論 P463）

「中外医事新報184号（明治20年11月25日）」に
「コカイン將に嚙嚙防に代らんとす」を発表。

7. 明治23年4月第1回日本医学会で「胡加乙涅槃局処麻酔の実験に就て」を演説、又内容を「東京医事新誌」648号に掲載（明治23年8月30日）

8. 「外科各論」中1/4が口腔外科である。

9. 気管切開術を明治8年に実施（明治21年猪子より早い）

医事雑誌，巻3「胃管癌腫治験」に47歳男，8月12日入院，8月28日気管圧迫—今気管ヲ開キテ呼吸ヲ助ケサレハ死期目前ニアルヲ以テ午前第十時気管截開術ヲ行フ（明治21年猪子氏が最初といわれていた）

10. その他，明治10年3月25日に造唇術（東京医事新誌39号），下口唇の血管腫に対し焼針術（東京医事新誌41号，明治12年1月4日），又歯性上顎洞炎の報告，抜歯術にコカイン注射を使用。なお，順天堂医事研究会報告第1集（明治18年4月刊）～第39集（明治19年12月刊）中にもかなり多くの口腔外科手術症例がある。

文 献

- 1) 阿知波五郎：近代日本外科学の成立，日本医史学会，昭和42年2月。
- 2) 中野 操：皇国医事大年表，南江堂，東京，昭和17年2月。
- 3) 佐藤尚久蔵版：順天堂医事雑誌，巻1（明治8年10月）～巻8（明治10年2月），英蘭堂。
- 4) 佐藤 進：増訂外科各論，巻1（明治20年10月）～巻13（明治23年5月），英蘭堂。
- 5) シュルツ原著，長谷川 泰校閲，宇野 朗補訂，山田良叔訳述：外科各論，明治15年刊，順生堂蔵版。
- 6) 西村，陣内，光野，井口編：新外科学，南山堂，東京，昭和43年4月。
- 7) 石橋長英，小川鼎三：お雇い外国人，鹿島研究所，東京，昭和44年9月。
- 8) 藤井尚久：医学文化年表，日新書院，東京，昭和17年7月。
- 9) 岡崎桂一郎：日本外科全書，杏林舎，東京，大正3年12月。